金光藤蔭高等学校
校長　武田充広

令和３年度　金光藤蔭高等学校　学校評価報告書

1　めざす学校像

建学精神　：我々が天地の大徳によって生かされ、家族をはじめ多くの人々の祈りによって育てられていることの自覚と感謝の念から発して、その自分を大切にし、将来世のお役に立つ人間となって、世界真の平和達成と文化の発展のために貢献し、そこに生甲斐と喜びとを見出す人でありたいという念願に立って、教育の徹底を期する。

教育理念　：「人間平等」・「個性尊重」・「心を育む」を柱に、情操教育（４つの力を育てる）を推進する
（４つの力）道徳的価値を養う教育／命の尊さを学ぶ宗教的教育／美的センスを育てる教育／自ら考える力を養う教育

教育目標　：①基本的生活習慣の確立
②高い規範意識と社会に通ずる礼節を身につけさせる
③個を伸ばす指導

2　中期的目標

１　法人理念の徹底と教育理念の浸透
（１）　法人理念の徹底
（２）　教育理念の浸透
２　新型コロナ対応の取り組み
（１）　新しい学校生活の実践
（２）　緊急事態宣言／まん延防止等重点措置における取り組み
（３）　罹患者／濃厚接触者等の対応
３　教育内容の充実改善
（１）コース内容の充実・検証
（２）基本的学力の定着
（３）生徒指導の充実
（４）進路指導の充実
４　学校組織活動の充実発展
（１）学校組織の活性化
（２）組織と業務を通した人材育成
５　広報募集活動の充実強化
（１）広報募集の強化
６　創立１００周年に向けて
（１）問題解決型・未来志向型の学校風土の醸成

【自己評価の結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価の結果と分析	学校評価委員会からの意見
自己評価アンケートの【アンケート】 ○生徒･保護者＜令和４年２月実施＞ 授業内容を中心に学校生活全般について全校生徒に調査した。（１６項目） ○教職員 ＜令和４年４月実施＞ 授業評価・生活指導・その他教育活動やコロナ禍での取り組み、学校改革の成果について検証した。（１６項目） 【分 析】 ○生徒アンケートではほとんどの項目で約８０％以上の生徒が肯定的な反応を示している。 ○教職員による自己評価では、「６コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」と１００％の教職員が実感している。また「組織と業務を通した人材育成に取り組み問題解決と新しい取り組みにチャレンジしている」の項目でも約８０％の教職員が共感している。 コロナ関連による感染予防や拡大防止に向けての取り組みに対して、９６％の教職員が十分に取り組めたと認識している。 今後も一人一人の生徒に寄り添った、丁寧な教科指導、生活指導を継続していきたい。	１法人の理念と教育目標の浸透 （１）法人の理念の徹底 （ア）建学精神の徹底については、「生徒、保護者の９０％が心の教育を実感」（イ）本部参拝・感謝祭も「９２％が学校行事として認識していることから、教育目標は達成されていると思う。 ２新型コロナの取り組み （１）新しい学校生活（２）非常時の取り組み（３）罹患者・濃厚接触者等の対応 （１）についての、登校経路分散による登下校指導や分散学年集会、放送及び学年別の始業式・終業式の実施などで、感染を防ぐ対策を実施していると評価。（２）大阪府の感染状況の推移を分析。他校に先駆けて早期に分散登校・短縮授業を実施できたと９５％の教員が認識できている。感染防止に策を設けている。（３）罹患者・濃厚接触者等の把握と学校対応については、「ウェブでお知らせ」を利用して教職員の情報共有と、生徒、保護者へ状況・方針を開示できたことが良かった。 ３教育内容の充実改善 （１）コース内容の充実・検証：各コースの取り組み評価を見せていただき、各コースも目標に沿って成果を上げている。特にカのトップアスリートコースは、全国大会で成果を上げていることが特出される。また、キの課題を抱える生徒の支援は、今後も保護者が肯定できる支援を続けてほしい。（２）基礎学力の定着と向上の取り組みは、生徒へのアンケート調査によると、「授業は分かりやすく工夫されている」と８６％の生徒が満足を感じていると回答。教員の授業に対する工夫が感じられる。（３）生徒指導の充実：アの転退学者は前年度より減少して３％台となったのは評価される。イの「生徒間のトラブルや SNS 関連を含む生徒指導事案の防止」：事案が大幅に減っている。指導の効果がでている。（４）進路指導の充実　アの進学指導の充実：は全体の進学率は横ばいである。この指導を少し工夫が必要であると思う。 ４学校組織活動の充実発展 （２）組織と業務を通した人材育成 イのベテラン・若手が協力して課題解決と新しい取り組みにチャレンジしている項目に教員の７８％がその取り組みを認識している。また、進路部（研究研修）が様々な校内・校外研修を提示し、若手教員も積極的に参加し、自己研鑽を高めている。とてもいいことだと思う。 最後に、教職員が生徒ひとり一人を大切にして、ひとりも置いていかない教育をしていると感じる。今後もその姿勢を貫いてほしいと思います。

3　本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
法人理念の徹底と教育理念の浸透	(1)法人理念の徹底 ア 建学精神の徹底 イ 本部参拝・感謝祭 (2) 教育理念の浸透 ア 情操教育の実践	(1)法人理念の徹底 ア 建学精神を全ての教育活動の基本として、教職員・生徒・保護者への啓発に努める。 イ 新型コロナの状況に応じて、宗務課と調整のうえ、実施を検討する。 (2) 教育理念の浸透 ア 道徳的価値を養う、命の尊さを学ぶ、美的センスを養う、自ら考える力を養う教育を学校生活全般を通して意識し実践する。	ア 式典・行事をはじめ、学年・学級での指導を通じて、建学精神を理解させる。 イ 天地・人・物への感謝と、社会のお役に立つという「心の教育」を本部参拝・感謝祭を通じて体現する。 ア ＨＲ・授業・課外活動や 修学旅行・校外学習・コース別行事等を通じて、情操教育の実践を心がける。	ア　生徒･保護者の約９０％が心の教育を実感していると認識している。式や行事の他、学年集会や日々のホームルームでの指導が生徒に浸透しているようである。 また昼休みや放課後、神徳堂（お広前）を訪れる生徒も多く、宗務課教員との対話を通して心の癒しを得ている生徒も多い。 イ　９２％の生徒が学校行事として認識している。コロナ禍の影響で本部参拝に代わり玉水教会参拝を実施することとなった。感謝祭･宗教の授業の中で「日々生かされている」「世のお役に立つ人間になる」ことへの意識喚起を促すことができた。感謝祭では参列した３年生全員が、感謝の気持ちをもって日々の学校生活を過ごす決意を新たにした。 ア　１００％の教員が諸活動を通して、情操教育の実践に取り組んでいると認識している。
新型コロナ対応の取り組み	(1)新しい学校生活 ア 感染予防の徹底 イ 教科活動・クラブ活動・学校行事 (2)非常時の取り組み ア 教育活動について (3)罹患者・濃厚接触者等の対応	(1)新しい学校生活の実践 ア マスクの着用・手洗い・換気の徹底 ア 昼食時の自席・黙食の徹底 イ 芸術（音・美・書)、体育、家庭科（調理）等における感染予防対策の徹底 イ クラブ活動の活動自粛・時間短縮・分散 イ 感染対策に留意した学校行事の遂行 (2)緊急事態宣言／まん延防止等重点措置における教育活動実践 ア 基本的には、大阪府教育庁の方針に沿って行う。 ア 本校の立地条件、施設面とを照らし合わせ、分散登校・短縮授業等を計画・実施する。 (3)罹患者・濃厚接触者の対応について ア 本人・家庭・医療機関・保健機関・学校医と連携し、速やかに情報収集・対応する。 ア クラスター防止、感染拡大防止を最優先課題とし、学級閉鎖・コース閉鎖・学年閉鎖・全校休校等、段階的措置を講じる。	ア 校内での生活様式の徹底は基より、全ての場面での感染予防意識を浸透させる。 イ 学年・クラス・教科・クラブにおいて、各担当者が感染予防に十分に留意し、計画・実施すること。 ア 状況に応じて、臨時休校・分散登校・短縮授業等の措置を行う。 ア 罹患者・濃厚接触者の把握と、指示の徹底。 ア 教職員間の情報共有と、生徒・保護者へのＷｅｂ／ＨＰ等を利用した、状況と方針の開示。 ア 校内の消毒や学校再開への速やかな準備。	ア　健康記録観察カードでの健康確認と登校時のマスク着用確認･手指消毒指導の徹底。 イ　登校経路分散による登下校指導や分散学年集会、放送及び学年別の始業式･終業式の実施。食堂内での飲食禁止、昼食時の黙食の徹底。上記、ア･イにおいて感染拡大防止にむけて９５％の教員が対策に取り組んでいると認識している。 ア　大阪府の感染状況の推移を分析しながら他校に先駆けて早期に分散登校･短縮授業等の措置を実施できたと９５％の教員が認識している。 ア　罹患者・濃厚接触者等の把握と学校対応については「ウェブでお知らせ」を利用し教職員間の情報共有と、生徒･保護者へ状況･方針を開示できた。 ア　早期の学校再開に向けて各部署が連携し施設の早期消毒や学校医との連携による教員のＰＣＲ検査受診及び感染拡大防止について多くの助言を得た。

教育内容の充実改善［コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導］	（１）コース内容の充実・検証 ア 特別進学	（１）コース内容の充実・検証 ア 特別進学については、少人数制の利点を生かして個々の学力向上に努める。各種講習や勉強合宿での内容の充実を図ると同時に、関西福祉大学をはじめ、大学見学や体験を通して進学意欲を持たせる。	ア 希望する四年制大学への全員合格を実現する。	ア　特別進学コースは入試対策･夏季･冬季講習に力を入れ、京都産業大学をはじめ多くの生徒が希望する大学に進学することができた。
	イ ライフクリエイティブ	イ ライフクリエイティブについては、キャリア科目の充実・改編を進める。	イ 生徒の関心を高め、進路選択へ繋げるキャリア科目の設定。	イ　ライフクリエイティブコースは協力校である辻学園、日本理美容専門学校に多数進学した。今後もより強い連携を続けたい。
	ウ エンカレッジ	ウ エンカレッジについては、具申書・高校生活カードや入学前面談等を十分活用して、個別教育支援計画の作成等を丁寧に行う。生徒・保護者との連携を密にし、「学びなおし」と「体験型授業」を実施する。	ウ エンカレッジ生徒の出席状況の改善、満足度の向上を図る。	ウ　エンカレッジコース開設５年目、「学びなおし」を募集のコンセプトに入れることで、入学者数の安定に繋がっている。 入学前面談実施や個別教育支援計画の作成に力を入れ、担任･学年が中心となって粘り強い取り組みを実施し９１％が進級することができた。３年生は４２名中３１名が進学した。
	エ ＩＴライセンス	エ ＩＴライセンスについては、専門学校との連携を密に、各種検定・資格取得の向上を目指す。また、動画分野やグラフィックデザイン、e-Sports 分野への拡大を検討。	エ ＩＴライセンスは、ＩＴパスポート（国家資格）をはじめ、各種検定試験の合格率向上を進路に反映させる。	エ　ＩＴライセンスコースは資格取得に向けて上級学年の多くの生徒が２級以上の上位級を取得できた。ＩＴパスポート（国家資格）にも１名が合格した。
	オ アートアニメーション	オ アートアニメーションについては、既存の商業美術的アニメ制作の域を超え、「デジタル制作の幅を広げる」ことを目的に展開していく。	オ 制作の喜びを味わうことのできる内容、総合的なプレゼンテーション能力の向上を図る。	オ　アートアニメーションコースは目的意識をはっきり持った生徒の確保につながっている。 ３年生は美術系やイラスト･声優分野の大学、専門学校へ多く進学した。
	カ トップアスリート	カ トップアスリートについては、６強化クラブの底上げ。次年度以降に向けて、追加種目（女子募集）の検討を行う。	カ 強化クラブの実績アップと生徒募集の成功。	カ　トップアスリートコースは、コロナ禍の中、モチベーション維持に苦慮しながらも柔道部の個人２名が全国大会出場、近畿大会（団体･個人）出場。 女子ソフトボールはインターハイベスト１６、全国私学大会ベスト８。 男子バスケットボール部はWINTER CUP 予選ベスト８。 女子バスケットボール部は、インターハイ･WINTER CUP 予選ベスト４。創部３年目で近畿大会出場を果たした。今後の成長が大いに期待できる。 次年度の募集も安定が見込まれる。

	キ 課題を抱える生徒への対応	キ 課題を抱える生徒への対応については、担任・学年を中心に、教務部（教育支援係）・生徒部・スクールカウンセラーが連携し、組織的に丁寧に取り組む。	キ 学校への登校、進級・卒業に向けた幅広い学校生活のサポートを丁寧に行う。	キ　担任･学年は生徒の登校状況を把握し、早い段階で教務部教育支援係等との連携で対応した。アンケートで「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応しているか」には８４％の生徒。「教員やスクールカウンセラーに気軽に相談できる」には９０％の保護者が肯定している。今後もケース会議や認定会議を通して、具体的な個別の支援策を迅速に打ち出せるよう連携を強めたい。
	（２）基本的学力の定着と向上	（２）基本的学力の定着と向上 低学力の生徒が多い。在籍者全体の基礎的学力の定着と、進学希望生徒の学力アップ		
	ア 全生徒への基礎基本の徹底	ア 基礎力指導(ＨＲ)や学習方法の充実・工夫に力を入れる。	ア 校時に設定した「学びたいむ」・「聴く力・考える力」を養う授業。	ア　令和３年度の「学びたいむ」は分散登校･短縮授業等の影響で１年間継続して実施することができなかった。基礎学力の定着に向けて令和４年度はコロナの感染状況に応じてできる限り継続して実施したい。
	イ 学習意欲のある生徒への特別対応	イ 英語検定等の対策講座や外部模擬試験の受験を積極的に展開する。	イ 教員による進学特別講習、藤蔭塾(放課後の自学自習サポート教室)を充実させる。	イ　放課後に実施した特別講習を受講した生徒の全員がその内容に満足している。また自学自習サポート教室（藤蔭塾）も大学生のアシスタントによるきめ細かなサポートのおかげで、生徒たちの学習意欲を高めることができた。
	ウ 研究授業の実施	ウ 授業改善や授業力向上に向けて研究授業等に取り組む。	ウ 教諭・常勤講師を対象として各教科で研究授業を実施する。 ウ 公開授業を年間２回の期間を設けて実施する。	ウ　令和３年度においては、コロナ感染拡大のため、分散登校･短縮授業、さらに相次ぐ学級閉鎖や多数の出席停止者が出たため研究授業･公開授業を実施することができなかった。令和４年度はコロナ感染の状況に応じて実施していきたい。
	エ 生徒による授業評価	エ 生徒による授業評価を授業改善に活かす。	エ 教諭・常勤講師全員が生徒による授業評価を実施して分析する 。	エ　アンケートでは「授業はわかりやすく、工夫がされているか」との質問に８６％の生徒が満足を感じている。同じく「本校では基礎学力向上に向けて丁寧でわかりやすい授業を行っている」との質問に９３％の保護者が満足していると回答している。しかし、科目別担当者によっては課題となる授業評価もみられたので、生徒による授業評価結果を教科内で共有し、振り返りシートを利用して教員一人一人の課題克服･授業改善につなげた。

教育内容の充実改善［コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導］	（３）生徒指導の充実 ア 生活習慣・学習習慣の確立 イ 生徒間のトラブルや、ＳＮＳ関連を含む生徒指導事案の防止 ウ 人権侵害事象の根絶 エ 挨拶・マナー等の徹底	（３）生徒指導の充実 生活背景や学習意識に課題を抱えて育ち、生活習慣未確立や学習習慣のない生徒が多い。生活習慣・学習習慣や自尊感情の醸成に力を入れて、出席状況や授業態度の改善に取り組む。 ア 転退学者数の改善を継続して行う。「３年間お預かりして育てる」「社会のよき構成員として世に送り出す」という使命感を大切にする。 イ 高校生らしい友達関係の構築が難しいケースがある。コミュニケーション能力を高め、望ましい対人関係を身に付けさせる。ＳＮＳの弊害や正しい使い方を教える。 ウ 道徳的価値観・命の尊さ・社会規範をしっかり理解させ、生徒間の人権侵害事象は起こさない。 エ 学校内外のあらゆる場面においての礼節（挨拶・礼儀・節度ある行動）を習慣化するよう指導を徹底する。	ア 転退学者５パーセント以下を達成する。 イ 指導事案の発生防止に繋がる日常的な事前指導に重点を置く。 ウ 人権侵害事象はゼロを目指す。 エ 望ましい服装・身だしなみや、礼節を徹底させる。	ア　転退学者数 令和１年度→６１名（7.４３%） 転学３４退学２７ 令和２年度→４９名（5.５６%） 転学３５退学１４ 令和３年度→３３名（3.５３%） 転学２０退学１３ 令和３年度の転退学率は昨年より減少し３%台となった。転退学者の約８０%は「不登校」を含む「学校生活学業不適応」や「進路変更」が理由であった。入学生の多くが小･中学時に家庭的、経済的、学習的に多くの課題を抱えている背景があることは否めない。生活習慣未確立や学習習慣のない生徒の自尊感情の醸成にさらに力を入れ、出席状況や授業態度の改善に取り組みたい。 イ　全体の生徒指導案件は昨年の２７件から１６件と大幅に減少した。そのうちＳＮＳの不適切な使用による事案が２件あり、ＨＲや学年集会で今後も注意をよびかけ、事案を未然に防ぐように継続して指導していきたい。 ウ　人権侵害事象はゼロであった。 エ　８４%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行なっている」と答えている。いろいろな場面での挨拶指導が浸透してきている。
	（４）進路指導の充実 ア 進学実績の向上 イ 望む職業への就労実現	（４）進路指導の充実 ア 大学・短大・専門系学校への進学実績を向上させる。 イ コロナ禍が続き、現役高校生には非常に厳しい情勢ではあるが、卒業段階での未進学者・未就労者の数をできる限り減らすことを目標とする。	ア 四年制大学をはじめ進学者を前年度よりアップさせる。 イ 未進学者・未就労者を前年度より減らす。	ア　全体の進学率は令和２年度の７６.６%から７８.５%とほぼ横ばいで、大学進学率は昨年度の３８.３%から２９.１%へと減少したが、就職への優位性の高い専門学校の割合が増加した。 イ　進学希望者の中での未決定率は浪人希望を含め2.１%、就職希望者の中での未決定者はゼロであった。進路未決定者ゼロを目指し、今後も粘り強い進路指導を継続していきたい。

学校組織活動の充実発展	(1)学校組織の活性化	(1)学校組織の活性化 ア 組織的・機動的学校体制の確立 教科指導やクラブ指導は専門性が必要、学年や分掌組織は組織力・機動力・実行力が必要である。それぞれが、連携を密に活発な業務活動を展開する。	ア 適性を配慮した人事配置を行う。 ア 将来を見据えた教員の採用を行う。	ア　準専任教員選考には９名の常勤講師が臨み、１名が任用となった。常勤講師は任期満了者に代わり、新規に１０名を採用した。生徒の学習指導や教育活動に熱心に取り組む教員の採用に今後も全力を尽くす。
	(2)組織と業務を通した人材育成	(2) 組織と業務を通した人材育成 ア 管理職や分掌組織の組織的業務を通して、５年後、１０年後の担い手を育成する。 イ 課題抽出、発展的改編型の業務を展開し、ベテラン・若手が協力して課題解決と新しい取り組みにチャレンジする。	ア 管理職や校務運営委員会メンバーを中心に、重要な学校課題に向き合い業務を実践させる イ 教職員間のコミュニケーションとディスカッションを大切にする。	ア　新任の常勤講師を対象に研修を充実させ、学年部長や分掌長が中心となり学級経営、生活･学習、学校業務に関する細かい指導を行った。 イ　ベテラン･若手が協力して課題解決と新しい取り組みにチャレンジしているかの項目に教員の７８％がその取り組みを認識している。また進路部（研究研修）が様々な校内･校外研修を提示し、若手教員も積極的にそれに参加し、自己研鑽力を高めている。
広報募集活動の充実強化	(1)広報募集の強化 ア 組織的な広報展開	(1)広報募集の強化 ア 総務部（入試広報）の組織的な広報展開。渉外担当者４名、教員担当者２名、事務室担当者１名が中心となり、広報活動の運営に当たる。	ア オープンスクール・学校説明会・中学校対象説明会・塾長説明会・個別相談会・私学展等全般を通して、丁寧かつわかりやすい広報活動を行う。	ア　中学生･保護者対象のオープンスクールを２回、入試説明会を４回、中学校教員向けの説明会もそれぞれ実施した。 昨年度に引き続きエンカレッジコース対象の個別相談会を実施した（相談実人数１８５人、内５３名がエンカレッジコースを受験、２８名が他コースを受験)。学校紹介ＤＶＤや各コースの体験授業にも改良を加えたが、コロナの影響により１回目オープンスクールを中止したことや私学全体を見ても低調であったことから参加者は昨年度より減少した。
	イ 外部広報	イ 外部広報 学校案内・ポスター・冊子等を企画・作成する。ホームページについては、総務部がリアルタイムで情報を発信する。	イ 中学生･保護者向けに、魅力ある媒体を提供する。	イ　学校案内冊子の発行を早め、中学校への速やかな広報活動を開始した。ホームページは中学生や保護者によりわかりやすい内容にし、学校行事等もタイムリーにアップするよう努めた。
	ウ 入学生徒の確保	ウ 入学生徒の確保 本校を対象とする生徒層を本校の「学校体制」と「教育内容」で丁寧に３年間育て上げるということで、生徒・保護者・中学・塾等の外部評価を得る。	ウ 令和４年度入試において、３００名を超える入学者数を確保する。	ウ　新入生２７３名となり目標を達成することができなかった。令和４年度は中学校･塾訪問数を増やし、ＳＮＳ等のＷｅｂツールを使い広報活動の強化･充実を図りたい。
創立一〇〇周年に向けて	(1)未来志向型の学校風土の醸成	(1)未来志向型の学校風土の醸成 令和９年（１００周年）に向けて、教職員一人一人が将来の本校の姿を描きながら、日々の業務に向き合い、意識させるようにする。	様々な学校課題に連帯感を持って、前向きに取り組み、学校の一体感を醸成する。	一人一人の生徒に誠実に真摯に向き合い、保護者との連携をさらに深め、教職員が魅力ある学校づくりのために日々研鑽しチャレンジすることに努める。